

はばたけ！ フェニックス

市民リポーター

石田 健太郎 (根下戸)



ライブハウス「フェニックス」で取材しました

大町商店街の活性化及び大館の街おこしの一環として大町商店街振興組合がつくった、ライブハウス「フェニックス」がオープンして一年余り。果たしてその効果のほどはどのようなのでしょうか。また、これからはどのような方針で運営されていくのでしょうか。一市民としても、一音楽ファンとしてもその動向が気になるところです。そこで今回は、フェニックスのオープン以来の利用状況や今後の運営方針等について、支配人の山城さんにお伺いしました。

「フェニックス」

どこにあるの？。実は私、フェニックスには一度も足を運んだことがなく、失礼ながら大体の場所さえ知らなかったのです。友人に尋ねてようやくその所在がわかったという有り様でした。

しかし、私だけが例外だったのでしょうか？ フェニックスの名を知ってはいても、行ったこともなければ場所も知らないという人、実は少なくないでしょうか？ それ一体なぜなのか？。私が思うに、市民の多くは、テレビや雑誌でしか目にする事のなかった「ライブハウス」のイメージを固定化してしまっていて、ステージ（上演者）と観客が一体になってつくり出す「ライブ」に自分が参加することに対する一種の近寄りがたさを

を感じているのではないかと。まずはそういう固定化されたイメージを打破して、ライブハウスを身近に感じることができたらなあ……。そんな思いでフェニックスのドアをノックしました。

現在はバンド活動が中心

いかにも防音効果の高そうな重いドアを開けた私の視界に真っ先に飛び込んできたのは、巨大なスピーカーでした。さほど広いとは思えないその空間（ちょうど学校の教室ぐらいでしょうか）にはおよそ似つかわしいとは思えないスピーカーの大きさにまず圧倒されました。さすがはライブハウスです。山城さんのお話によると、この空間に一度に入った観客の数は、最高で百人ぐらいだったとのこと。ここに百人も詰まったら、雑誌で見かける「酸欠ライブ」も十分有り得るよなあ、と思いました。

さてそのフェニックス、どのように利用されているのでしょうか。山城さんに伺うと、「大体月に二〜三回、多い時だと毎週ですが、主に週末、市内のアマチュアバンドによるライブ演奏会の会場としての利用が多いですね。また、利用料金が低額なこと、バンドの練習スタジオとしても気軽に利用され、好評を得ています」とのこと。お話を伺ううちに、市内にはアマチュアバンドが三十組もあるということを知り、驚きました。

そういう人たちにとって、数少ない練習スタジオが一つ増えたことは、貴重な意味を持つのではないのでしょうか。秋田県は音楽活動の水準が高く、アマチュアバンドコンテストの東北大会などでも上位に食い込む力を持つグループもあるのだそうです。近い将来、フェニックスで実力を培った大館出身のバンドをテレビで見られる日も来るのではないのでしょうか。

おじちゃんもライブ

さて、現在フェニックスでライブコンサートを行っているバンドの多くは、音楽のジャンルでいえばロックに分類されるもののようなです。それゆえ、客層が若者に限定されてしまっていることは否定出来ません。山城さんも「今後は、利用客の年齢層拡大という課題に取り組んでいきたいですね」と話



支配人の山城さん

します。では、具体的にどんな構想があるのかを伺ってみました。「例えば、軽くアルコールをたしなみながらジャズのライブを聴くとか……。また、津軽三味線のライブなんかも面白いかも知れませんか」とのこと。これなら若者だけでなく、お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんでもライブの魅力に親しめそうです。おじいちゃんが津軽三味線を聴きながらおぼしを突き上げるような図は想像しにくいけれど、ライブハウスはコンサートホールとは違い、観衆のすぐそばで演奏が行われますら、音楽を耳で聴くというよりも、体で感じるといった方が適切なのです。だから、そんな場面だつてあるかも知れませんか。

はばたけフェニックス

「フェニックス」の名には、不死鳥（フェニックス）のように、再び活気ある街にのみがえろう、という思いが込められています。「客層が固定化されてしまっている点では目立った効果は現れていないようです。でも、これからはライブハウスという形式にとらわれず、様々な可能性を秘めたスペースとして多くの市民に利用していただきたいですね」と山城さんは話します。オープンから一年余り、これらがフェニックスにとつての正念場といえそうです。